

＜親類＞の解説

城 雄二

この＜親類＞という授業書は、今から15年くらい前に、「ホントかなどうかな」のミニ授業書シリーズの一つとして発表し、道徳の時間などでやられてきたものです。1時間ものの授業書で使いやすいこともあって、今でも、ときたま使っている人があるようです。

この授業書は旧版を少し改訂しましたが、中身は本質的に変わっていません。文章の分かりにくいところを改め、ところどころにカットを入れることにしました。

この授業で難しいところは、両親が揃っていない子がいると、どうするのかということでしょう。わたしは事実としてそれを受け止める子にしたいと思いますから、先生はこだわらないで、さらっとやってほしいと思います。しかし、先生の方がどうしてもこだわるようでしたら、この授業書はしないでください。先生のこだわりは子どもに伝わるからです。

もう一つ、この授業書で難しいところは、【質問9】の後のお話です。自分の祖先が、奈良時代には日本の人口よりも、世界の人口よりも計算上は多くなる、そのわけが納得できないことでしょう。

結論から言えば、この単純計算の結果は、狭い日本の中で、顔も知らない親類同志が結婚していることを示しています。じつは、この【質問9】がこの授業書の目玉なのです。はっきりはわからないが、何十万・何百万というたくさんの親類の血がつながって、今自分とみんなが生きていることに気がついてもらえればいいのです。もしも、子どもたちがわかりにくいようなら、3ページのお話の下の方で、「親類同志が結婚していないか探してごらん」といって、探させてみましょう。少しはヒントになるかもしれません。

最後に断わっておきますが、この授業書は「人類みな親類である」という、「である」ことを教えたいものではありません。「他人とと思っている人の中に、もしかしたら親類がいっぱいいるかもしれない」という、「かもしれない」に気づいてほしい授業書なのです。そのことによって、いままでの親類という概念が急に広がり、自分と他人とのつながりが広く見直せるようになることを願って、この授業書を作りました。